

# タイ東北部における 20 世紀初頭からの 地名復原とデータベース化の試み

永田 好克 (大阪市立大学 大学院工学研究科)

地名は所在地の情報を他者と共有し、記録するための重要な情報であるが、さまざまな理由による変遷を経て現在の地名にいたっており、過去の地名と異なることは珍しくない。従って過去の資料にみえる地名の空間上の考察や分析には、当時の地名と現在の地名の対応を確認することが不可欠である。また、地名はその名付けの背景を知る情報すなわち当地の自然環境や社会環境を示すものが数多い。過去の地名を現在の地名と対応させた地名履歴データベースは、単に過去の資料記録を空間上に配置することに寄与するだけでなく、地域の生活誌あるいは小地域の歴史に関する客観的な情報を提供する基盤となる。

筆者は、タイ東北部を中心とし、概ね 20 世紀初頭以降の村落単位の地名の収集と地名履歴データベースの構築を進めている。本稿では現状と取り組みおよび課題について報告する。

## A study of place names in the northeast of Thailand over the past one century for a historical gazetteer

NAGATA Yoshikatsu (Graduate School of Engineering, Osaka City University)

Place names are important information to share and to record the location of the event. But place names are not always same for long by various reasons of changes. For enabling spatial analysis of an area with historical information, it is indispensable to organize the relationship between such old place names and their corresponding current names. Since place names sometimes suggest their natural or social environment of locations, a historical database of place names may contribute not only to allocate old records on maps but also to offer richer information on livelihood and history of a community.

The author has been collecting place names of village level in the northeast of Thailand over the past one century, and organizing a historical database of them. Current activities and tasks will be presented.

### 1. はじめに

地名は所在地の情報を他者と共有し、また、記録するための重要な情報である。一方で地名は平面空間上のあいまい性と非周期性を持つやっかいな存在でもあり、今後ますます進展する空間情報を介するさまざまなサービスでは、処理系の内部で目的地を位置座標で表現することで確度を高めている。地名は対応表を経て位置座標に変換されることで空間情報上のサービスや処理に活用可能となる。

地名は過去から現在まで、さまざまな理由による変遷を経て現在の地名にいたる。従って過去の資料をひもとくとき、当時の地名と現在の地名の対応が明確になって初めて現代的な空間上の考察や分析が可能となる。また、地名はその名付けの背景を知る情報すなわち当地の自然環境や社会環境を示すことが普通である。過去の地名を現在の地名と対応させた地名履歴データベースは、単に過去の資料記録を空間上に配置することに寄与するだけでなく、地域の生活誌あるいは

小地域の歴史に関する客観的な情報を提供する基盤となる。

このような地名履歴データベースの重要性は認識されていても、依拠するにふさわしい網羅的な古い資料と多くの労力が不可欠であることから、実際のデータ整備と構築には地道な取り組みによるしかないのが現状である。一方で、取り組みを継続することで発現する、デジタルデータとして取り扱う上での課題は、情報学の人文社会科学への寄与の一面となるものである。

本稿ではタイ東北地方を中心とし、概ね 20 世紀初頭以降の村落単位の地名の収集と、これらにより構築を進めている地名履歴データベースに関する現状と取り組みおよび課題について報告する。

### 2. 目的

本邦における明治期以降の地名については桶谷が精力的に位置情報を含めてデータベース化に取り組み[1]、また、四井らとともに明治および大正期の地形図から収集した地名をベースとしたデジタル地名辞書の構築に取り組んだ[2]こと



図1 タイ東北部と農村住民の移動例  
Figure 1 Northeast Thailand and an example path of rural migrant.

から、現在これらの成果は学術的に利用可能な段階に至っている[3]。収録された地名の粒度は現行の行政組織である村よりも相当に狭い意味での村あるいは集落である。

筆者が長年研究活動の対象として取り扱うタイ、とくに、タイ東北部(図1)についても、現行の5万分の1地形図に記載されている地名の粒度は集落単位であり、住民の記憶や記録に表現される地名も概ねこの単位である。また、内務行政上も集落にほぼ同等の規模の行政村と呼ぶ単位で多くのデータが蓄積されてきた。従って、社会経済的な分析をする上でも、人文学的な考察をする上でも、集落名はコアとなる地名である。

筆者が開拓農村において実施した村の発展史に関する聞き取り調査では、よい農地を求めた農民の移住は予想以上に頻繁かつ長距離に及んでおり、出生地や移住履歴地の地名を現在の地名ではなく当時の地名で述べることも多かった[4]。図1は模式的に農民の移住例を示したものであり、一人で数次にわたり、合計数百キロに及ぶ移動の末に現在地に居住する。一農民個人の移住履歴だけでなく、その両親や祖父母などに遡ったゆかりの地まで尋ねると、ますます記憶にあるままの古い地名で語られる。現在の地名は、タイ内務省地域開発局が実施する村落基礎データ調査等から抽出した行政村名を地形図と照合して構築してきた地名データベースを保有しているものの、これでは現在の位置を特定できないことは少なくない。村史で語られる初期の開拓者につい

ても出身地や移住経由地についての記録に地名が見えるものの、これらが語り継がれた当時の古い地名であると、現在地との照合は困難になる。

このような筆者自身の経験にもとづき、空間上の分析を充実させるには、地名履歴データベースの構築が必須であると考えてきた。過去としてどこまで遡るのかについては、当面限定する必要がある。集落で触れる過去の地名は、よほど歴史の古い集落をのぞけば概ね数世代前までであった。また、集落レベルの地名が記載され網羅的に閲覧可能な地図等の資料は20世紀初頭以降作成のものが多い。よって、20世紀初頭以降の集落単位の地名を対象に収集と地名履歴データベースの構築をすすめている。

### 3. 資料

本稿で報告する取り組みでは、20世紀初頭から半ばにかけての地名収集の典拠として、大別して二種類の資料を用いている。ひとつは冊子体の地名辞書であり、もうひとつは地形図をはじめとする地図類である。

第二次世界大戦期に、日本だけでなく米国においてもタイを対象とした地名辞書が編纂された。このうち米国発行の“Gazetteer to Maps of Thailand”[5]は当時入手できた地図から網羅的に地名を収集したものであり、粒度の荒いもので10分単位、粒度の小さいもので1分単位での経緯度座標が掲載されている。10分単位では概ね15km四方の範囲にある地名に同じ座標が当てられることになり、隣接する集落の区別はできない。また、ローマ字化された記載であるためタイ文字での同音異字や同音異義を区別できない。すなわち、このあたりにこんな音で表現できる集落がある、までにとどまる情報である。日本発行の当時の地名辞書「大南洋地名辞典」は、時勢に鑑み急いで編集されたことに起因すると思われる収録内容の粗密が見られる。両者とも足がかりになる資料ではあるが、充分とは言えない。

筆者は既報[6]において、当時の網羅的な地図資料として、第二次世界大戦期に旧日本陸軍陸地測量部が発行した外邦図を用いて地名収集を行ったことを中心に報告を行った。ここでは、著名な地名であっても地図に記載された位置に無視できない差異があることから、現旧で名称が異なる地名の照合はさらに困難であることを指摘した。またUnicode表に未収録の小文字カタカナが多用されており、デジタルデータ化に支障があることを指摘した。

以降、筆者はこれら外邦図の典拠となったタイ文字で記載された原地図(以降、RSD地図)を網羅的に閲覧複写する機会を得た。RSD地図は、1枚の図郭が南北1度、東西1度の縮尺20万分の1でタイ国地図局(Royal Survey Department)が1920年前後に初版の編纂を進めて発行し、1940年代までの改訂版が残っている。以下ではRSD地図

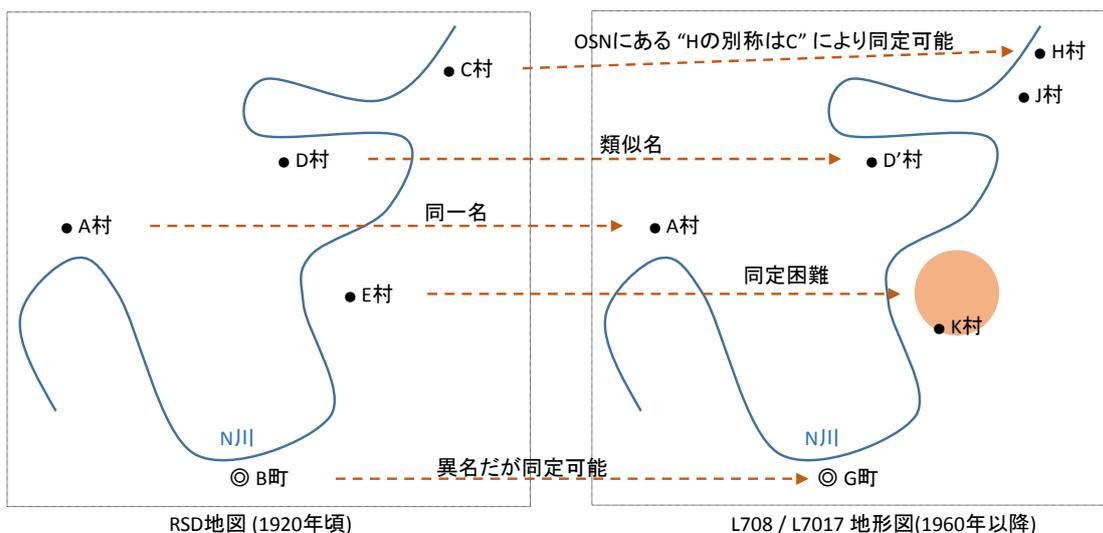


図2 新旧地名の照合 ([8]より)  
Figure 2 Identification of old place names. (Source:[8])

からの地名収集と位置照合を行った結果を中心に述べる。

#### 4. 新旧の地名

現時点でタイ東北地方に該当する範囲(約16万平方キロメートル)においてRSD地図から約3,500地点の地名を収集した。地図上からの収集にあたっては、記載位置から計算して位置座標も算出している。これらタイ文字による地名を現在の地名と照合するために1960年代以降に発行された二種類の5万分の1地形図、L708シリーズとL7017シリーズを参照した。L708シリーズは、米国Army Map Serviceの支援でタイ国地図局(Royal Thai Survey Department, RTSD)が発行したものであり、地名はタイ文字とローマ字の併記である。L7017シリーズは、RTSDによる大幅な改訂版と考えてよく、また収録された地名はほぼ標準語化を終えた地名であることから現代の地名との差異は小さい。

新旧の地名の照合は1920年前後のRSD地図と1960年以降のL708地形図を比較して、記載された位置を参考に進めてきた。図2は照合作業を模式的に示したものである。図中のA村のように同一名で同一地点にある村は全く問題がないが、E村のように、やや位置が違う上に名称が違う場合には確定できない。B町のように河川の屈曲部のような地形上のランドマークに位置する場合には、名称が違っていても照合は容易である。C村は、両地図の比較だけでは対応する現代の村がH村なのかJ村なのか判然としないが、“Thailand: Official Standard Names Gazetteer”[7]に豊富に収録された別称情報によって、H村であると照合できる例である。図3は、別称情報や周辺の地形を勘

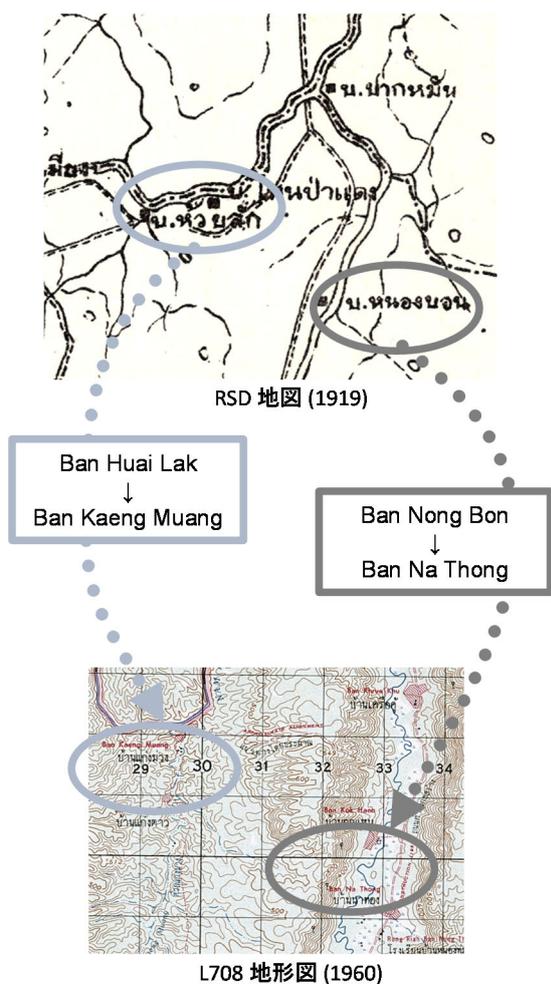


図3 地名の変更  
Figure 3 Changes in place names.

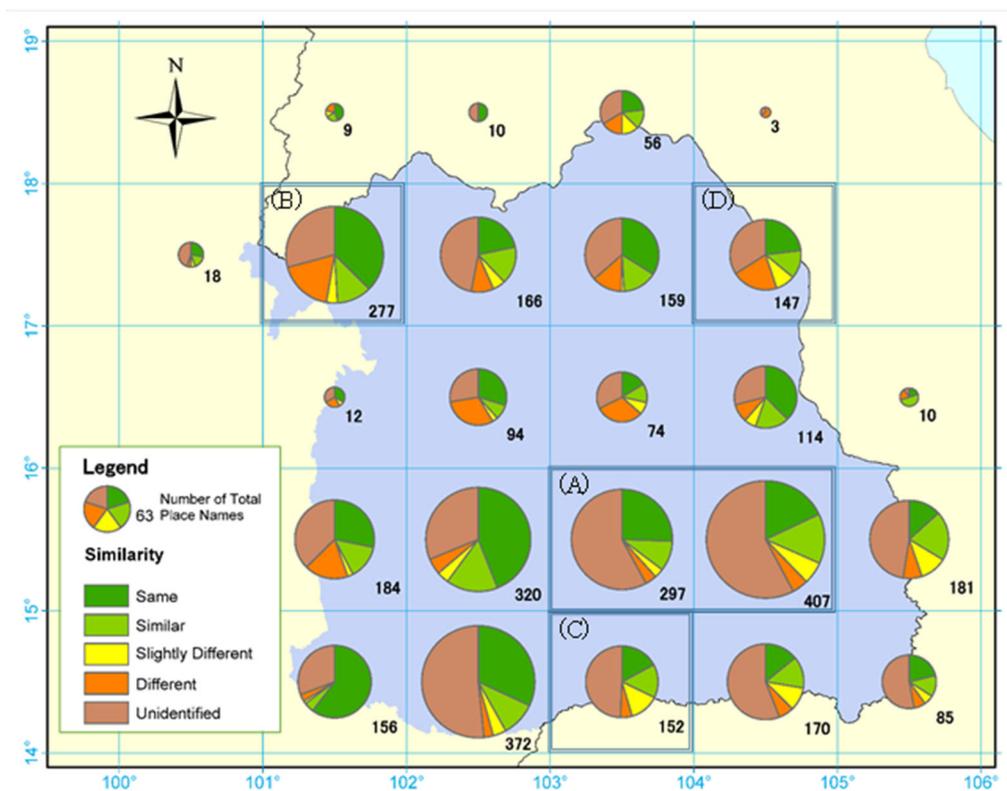


図4 地名異同の地域間差異 ([9]より)  
Figure 4 Similarity of place names by areas. (Source:[9])

案して新旧の地名を照合し、地名の変更について確認できた例である。

現在までに照合できた地名は約 2,000 地点であり、残りの約 1,500 地点については別途照合するための情報が必要である。照合が可能であった地名を新旧の地名の類似度によって分類したものが表 1 である。容易に照合ができた、すなわち、地名に大きな差異がみられなかった村落名は全体の 4 割ほどであり、約 6 割は地名に用いられた単語の意味や、地域の言葉と標準語との相違、別称であることを示す何らかの資料などを頼りに照合を進めなければならない。

新旧の地名の類似度は地域により異なる傾向を示す。図 4 は RSD 地図の図郭別の地名の類似度と新旧地名の照合の可否を示したものである。図中の Unidentified は新旧で地名の対応を確定で

きない古い地名である。図 4 の(A)の地域はメコン河の大きな支流であるムーン川に沿って広大な低地が続く村落の消長が多い地域である。さらに、(C)の地域も含めて古い地名にはタイ語ではない地域の主流言語が多く使われ、従って後年、地名の標準語化の動きにより新旧の地名に差異が大きくなる傾向がうかがえる。(B)の地域は、谷筋が多い地形であるために地形を参考にすれば名称が異なっても新旧の地名の関係を照合しやすい地域である。(D)の地域は、国境であるメコン河をはさんで隣接する旧仏領インドシナ政府による地図作成の成果の恩恵を受けていると考えており、仏領インドシナ政府の地図との比較は今後進めて行きたい。

## 5. 地名履歴データの整理

現時点で RSD 地図から収集した 20 世紀初頭の村レベルの地名は約 3,500 である。対して、RSD 地図の古い地名に対応する現在に続く地名として L708 地形図から収集した地名が約 2,100 である。このほか、1940 年代の地名集である[5]に収録されているタイ東北部の村落名が別称による重複を除き約 5,000、1960 年代の地名集である[7]には約 2,500 である。これらについて、対応を照合できた地名については、順次作業用の Microsoft Access 上のデータベースに整理している。

表 1 地名の類似性  
Table 1 Similarity of place names.

分類	地点数
同一	991
近似	425
地域主流の別言語	16
同一の意味	16
やや相違	188
全く相違	332

Topic type: 地名  
 Topic name: (L708より) Ban Kulukhu  
 (OSNより) BAN KULUKHU  
 (DNYより) Ban Kotla Gu  
 (GHZより) クッドラーケー村

- <http://pladaek.media.osaka-cu.ac.jp/place-name/psi/place-name-OSN096830>
- <http://pladaek.media.osaka-cu.ac.jp/place-name/psi/place-name-L708-000579>
- <http://pladaek.media.osaka-cu.ac.jp/place-name/psi/place-name-DNY008670>
- <http://pladaek.media.osaka-cu.ac.jp/place-name/psi/place-name-SA000017>
- <http://pladaek.media.osaka-cu.ac.jp/place-name/psi/place-name-GHZ000150>

---

SameAs ID (出現)  
 1. SA000017

---

記載する (4)  
 記載される側: This topic 記載する側: Thailand, Official Standard Names, Gazetteer No.97 付帯情報: OSN-BAN KULUKHU  
 記載される側: This topic 記載する側: タイ地形図 L708 付帯情報: L708-Ban Kulukhu  
 記載される側: This topic 記載する側: 外邦図 付帯情報: GHZ-クッドラーケー村  
 記載される側: This topic 記載する側: 大南洋地名辞典 付帯情報: DNY-Ban Kotla Gu

全体-部分関係 (1)  
 部分: This topic 全体: Nakhon Phanom (地域(OSN))

分類する (1)  
 分類される側: This topic 分類する側: populated place (種類(OSN))

参照する(OSN) (1)  
 参照する側(OSN): This topic 参照される側(OSN): Thailand 1:50000, AMS L708, Army Map Service, Washington, 1956. 63. (In English and Thai) (参照(OSN))

地図参照する (1)  
 地図参照する側: This topic 地図参照される側: 外邦図タイ緯二十万分二画23巻 (参照地図(GHZ))

地名	緯度(DMS)	経度(DMS)	緯度(DEG)	経度(DEG)	出典
Ban Kotla Gu	17°20'	104°30'	17.3333	104.5000	大南洋地名辞典
クッドラーケー村	17°20' 14"	104°30' 03"	17.3372	104.5007	外邦図
Ban Kulukhu	17°19' 43"	104°33' 31"	17.3285°	104.5586°	タイ地形図 L708
BAN KULUKHU	17°20'	104°33'	17.3333	104.5500	Thailand, Official Standard Names, Gazetteer No.97

出典: 大南洋地名辞典  
 ページ: 44  
 代表名(DNY): Ban Kotla Gu  
 区分(DNY): 村  
 県(DNY): Nakhon Phanom  
 経度(DEG): 104.5000  
 経度(DMS): 104°30'  
 緯度(DEG): 17.3333  
 緯度(DMS): 17°20'

出典: 外邦図  
 代表名(GHZ): クッドラーケー村  
 経度(DEG): 104.5007  
 経度(DMS): 104°30' 03"  
 緯度(DEG): 17.3372  
 緯度(DMS): 17°20' 14"

図 5 閲覧用の地名履歴データ  
 Figure 5 An example of a historical digital gazetteer.

閲覧用としては、Topic Maps ツールである Ontopia を用いて検索や表示が可能な仕組みを試行中である(図 5)。ただし、設計当初よりも入手した地図資料の種類が増えてきたため、一度設計を見直さなければならないと考えている。

20 世紀前半のタイ東北部をとりまく地図に、中華民国発行のものがある。この地図では地名がタイ文字やローマ字ではなく中国語で表記され

ており、同時代の外邦図を想起させるものである。収録地名や道路ネットワークなどの基盤となる情報が外邦図や RSD 地図とは異なっているが、独自に測量調査をしたものか、別の地図に依拠するのかは明示されていない。収録された地名が RSD 地図とは異なっており、同時期の仏領インドシナ政府発行の地図とも合わせながら古い地名の情報を増やすことができる材料となる。表 2 は外邦図も含めたこの時期の地図に表記された地名の例である。

## 6. 今後の取り組み

現行の地名では村が成立した当時の背景を知る単語が消失し、例えば「発展」「友好」などの理念や願望を示す名称に変更されているものが少なからず存在する。また、地域で主流の母語による名称から、国家の標準語による表記に寄せた変更も数多い。地域の母語による地名を復原することで、居住民の民族アイデンティティとの関係を示すデータセットを提供する基盤となりうるものである。例えば、図 6 に示す地域では、古い地名に対応する現在の集落を特定できないものが多い。この地域には、国家の標準語とは全く異なる母語を日常的に用いる集落が多いことと関係があるものと考えている。このように新旧で名称を異にする場合には、位置精度が芳しくない古い地図だけでは対応関係を確定しづらいため、今後現地調査での聞き取りによって、地名の変遷に関する情報を収集することを計画している。

現在は別国家であるが国境のメコーン河をはさんだ対岸のラオスとの交流が国境の存在以前から長い地域であり、地名表現にも共通のものが多い。タイ側での聞き取り調査でも、先祖の出身地としてラオス国内を言及する事例が多いが、言及されるラオス側の地名の所在地については、タイ国内の地名よりも確認が難しいのが現状である。このようなことから、タイ東北部に隣接するラオス側の地名についても、現在収集を進めているところである。このデータが充実することによって、現在の農村住民の数世代にわたる移住経路を地理的に明らかにしていきたい。またメ

表 2 20 世紀前半のタイの諸地図における地名表記の例  
 Table 2 An example of place name on maps of Thailand in early 20th century.

地図	地名表記	読み(参考)
中華民国 (1940)	打馬根	dǎ mǎ gēn
仏領インドシナ (1926)	B. Dua Makeng	
外邦図 (1941)	マークケェン町(ウドーン)	
RSD, Thailand (1941)	จ.อุครธานี	Udon Thani

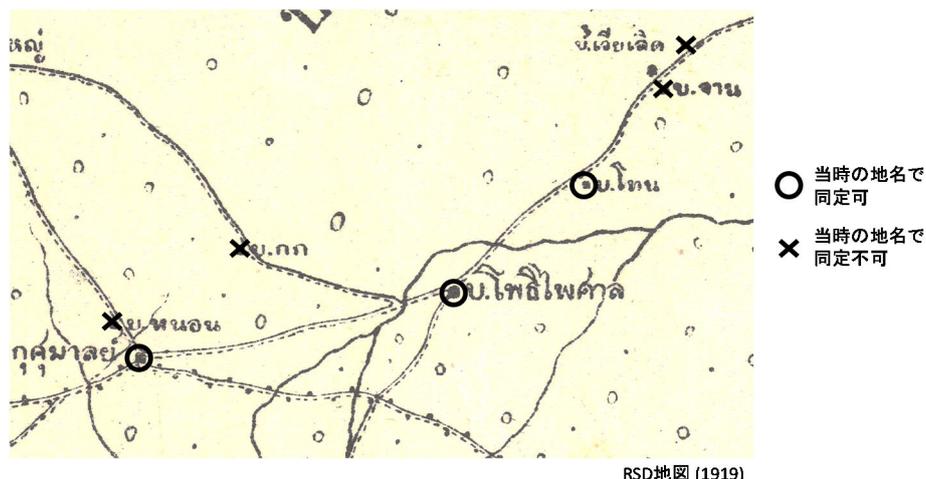


図6 古い地名と現在の地名に大きな相違がある地域の例  
Figure 6 A typical area where old place names much differ from current names.

コーン河をはさんだ地域の発展交流についての分析に寄与する基礎的なデータとしていきたいと考えている。

### 謝辞

本稿は科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)19K12700による研究の一部である。株式会社ナレッジ・シナジーの内藤求氏にはWeb上に展開する地名履歴データベースの開発に協力いただいている。東北大学の外邦図データベースWebページは本稿の契機となる貴重な資料を公開しているものである。米国議会図書館においては数多くの地図資料の複写を得ることができた。

### 参考文献

- [1] 桶谷猪久夫: 地図・地名データベース, 情報処理学会研究報告, Vol.2009-CH-83 No.3, pp.1-8 (2009).
- [2] 四井恵介, 関野樹, 原正一郎, 桶谷猪久夫, 柴山守: 明治・大正期旧5万分の1地形図をベースにした地名辞書構築, じんもんこん 2010 論文集, 2010(15), pp.211-216 (2010).
- [3] 人間文化研究機構: 歴史地名データ, 人間文化研究機構, [http://www.nihu.jp/ja/publication/source\\_map](http://www.nihu.jp/ja/publication/source_map), (参照 2019-10-23).
- [4] HGIS 研究協議会(編): 歴史 GIS の地平: 景観・環境・地域構造の復原に向けて, 永田好克: 東北タイのソンクラム川流域にみる現代開拓農村の形成過程, pp.137-148, 勉誠出版 (2012).
- [5] War Department, Army Map Service: Gazetteer to maps of Thailand, U.S. Army (1944).
- [6] 永田好克: タイのデジタル地名辞書基盤の構築, じんもんこん 2017 論文集, 2017(2), pp.29-34 (2017).
- [7] United States Board on Geographic Names: Thailand, Official Standard Names Gazetteer No.97,

Office of Geography, Department of the Interior U.S. (1966)

[8] Yoshikatsu Nagata: Community Level Old Place Names in the Northeast of Thailand for a Historical Digital Gazetteer, Proceedings of the 2019 PNC Annual Conference and Joint Meetings, <http://compling.hss.ntu.edu.sg/events/2019-pnc/PNC-2019-ebook.pdf>, (参照 2019-10-24), pp.100-105 (2019).

[9] Nagata, Y.: Integrating Place Names of the Early 20th Century into a Spatio-Temporal Gazetteer of Northeast Thailand, International Journal of Geoinformatics, Vol.15, No.2, pp.69-78 (2019).